

第3節 城久遺跡群の歴史的評価の前提—日本古代・中世前期並行期喜界島編年史料集稿

石上英一

城久遺跡群及びそれを擁する喜界島の、歴史的発展、日本列島南部の政治・文化及び国際関係に関わる歴史的意義・機能を検討する素材として、また城久遺跡群の遺構・遺物を検討するための歴史情報群として、日本列島の7世紀～13世紀の時期における喜界島及び同島を含む奄美諸島・琉球列島に関する史料（広域概念としての「ヤク」「キカイ」を含む）を編年により提示する。この趣旨に基づく史料の集成は、既に、下記の論考等（史料集成を中心とした論考のみ掲げる）によりなされている。

池邊 彌「南島古代史料集成」『伝承文化』2号、成城大学民俗学研究室、1961年12月

松田 清『古代中世奄美史料』、JCA出版、1981年12月

山里純一「日本古代史料にみえる南島」『史料編集室紀要』23、沖縄県教育委員会、1998年3月

『古代日本と南島の交流』、吉川弘文館、1999年7月

永山修一「文献史学からみたキカイガシマ」『喜界島研究シンポジウム 古代・中世のキカイガシマ 資料集』、喜界島郷土研究会・九州国立博物館勇利推進本部、2005年3月

「文献から見たキカイジマ」池田榮史編『古代中世の境界領域』、高志書院、2008年3月（文部科学省特定領域研究「中世考古学の総合的研究—学融合を目指した新領域創生—」の「中世東アジアの交流・交易に関する新研究戦略の開発・検討」班主催シンポジウム「古代・中世の境界領域—キカイガイシマの位置付けをめぐって—」（2007年2月10～12日）の報告に基づく論文）

「キカイガシマの時代—文献から見る古代・中世の南島—」史跡等総合活用支援推進事業シンポジウム『古代・中世喜界島からの招待状～城久遺跡群の発掘調査成果と未来～』資料集、喜界町・喜界町教育委員会、2015年1月

上記の史料集成の外にも、喜界町誌編纂委員会『喜界町誌』（喜界町、2000年8月）や、喜界島史に関わる文献史料の基礎的研究の諸論考があるが、それらは、史料の採録に関わる論考についてのみ文末に記すこととする。

喜界島（奄美諸島）編年史料稿（7～13世紀編）

○凡例

- (1) 1266年以降の編年史料は、拙著『奄美諸島編年史料 古琉球期編』上（吉川弘文館、2014年5月）に掲げたので、本稿末に網文・引用史料一覧のみ掲げることとする。
- (2) 編年体の体例は、原則、『奄美諸島編年史料 古琉球期編』に準拠するが、組版の便宜のため、若干の簡略化を行う。
 - 1) 網文における國号日本は、便宜、大寶令制定後に使用する。
 - 2) 小字割書《**》、WORDで記せない漢字[偏旁]の如く表示する。
- (3) 返点は編者による。

◎六〇七年（日本推古天皇十六年・隋大業三年・丁卯）

○三月、隋煬帝、朱寬ヲ流求國ニ遣ハス、

〔隋書〕卷三 帝紀第三 煬帝 楊廣 上

大業三年《○中略》三月《○中略》癸丑、遣_二羽騎尉朱寬使於流求國_一、

〔隋書〕卷三 帝紀第三 煬帝 楊廣 上

大業六年《○中略》二月乙巳、武賁郎將陳稜・朝請大夫張鎮州擊_二流求_一、破_レ之、獻_二俘萬七千口_一、頒_二賜百官_一、

〔隋書〕卷二十四 志第十九 食貨 食

煬帝即位、《○中略》又、使_二朝請大夫張鎮州_一、擊_二流求_一、俘虜數萬、士卒深入、蒙犯_二瘴癘_一、餒疾而死者十八九、

〔隋書〕卷六十四 列傳第二十九

陳稜、字長威、廬江襄安人也、《○中略》

煬帝即位、授驃騎將軍、大業三年、拜武賁郎將、後三歲、與朝請大夫張鎮周、發東陽、兵萬餘人、自義安汎海、擊流求國、月餘而至、流求人、初見船艦、以爲商旅、往往詣軍中貿易、稜率衆登岸、遣鎮周爲先鋒、其主歡斯渴刺兜、遣兵拒戰、鎮周頻擊破之、稜進至低沒檀洞、其小王歡斯老模、率兵拒戰、稜擊敗之、斬老模、其日霧雨晦冥、將士皆懼、稜、刑白馬、以祭海神、既而開霽、分爲五軍、趣其都邑、渴刺兜率衆數千逆拒、稜遣鎮周、又先鋒擊走之、稜乘勝逐北、至其柵、渴刺兜背柵而陣、稜盡銳擊之、從辰至未、苦鬪不息、渴刺兜自以軍疲、引入柵、稜遂填塹、攻破其柵、斬渴刺兜、獲其子烏槌、虜男女數千而歸、帝大悅、進稜位右光祿大夫、武賁如故、鎮周金紫光祿大夫、

〔隋書〕卷八十一 列傳第四十六 東夷 流求國

流求國、居海島之中、當建安郡東、水行五日而至、

土多山洞、其王姓歡斯氏、名渴刺兜、不知其由來、有國代數也、彼土人呼之、爲可老羊、妻曰多拔茶、所居、曰波羅檀洞、塹柵三重、環以流水、樹棘爲藩、王所居舍、其大一十六間、琱刻禽獸、多鬬鏤樹、似橘而葉密、條纖如髮、然下垂、

國有四五帥、統諸洞、洞有小王、往往有村、村有烏了帥、並以善戰者爲之、自相樹立、理一村之事、

男女皆以白紵繩纏髮、從項後盤繞至額、其男子用鳥羽爲冠、裝以珠貝、飾以赤毛、形製不同、婦人以羅紋白布爲帽、其形正方、織鬬鏤皮并雜色紵及雜毛以爲衣、製裁不一、綴毛垂螺爲飾、雜色相間、下垂小貝、其聲如珮、綴鐺施釧、懸珠於頸、織藤爲笠、飾以毛羽、

有刀·稍·弓·箭·劍·鉞之屬、其處少鐵、刃皆薄小、多以骨角輔助之、編紵爲甲、或用熊豹皮、王乘木獸、令左右輿之而行、導從不過數十人、小王乘木机、鏤爲獸形、

國人好相攻擊、人皆驍健善走、難死而耐創、諸洞各爲部隊、不相救助、兩陣相當、勇者三五人、出前跳噪、交言相罵、因相擊射、如其不勝、一軍皆走、遣人致謝、即共和解、收取鬬死者、共聚而食之、仍以鬬鏤將向王所、王則賜之以冠、使爲隊帥、無賦斂、有事則均稅、用刑亦無常准、皆臨事科決、犯罪皆斷於烏了帥、不伏則上請於王、王、令臣下共議定之、獄無枷鎖、唯用繩縛、決死刑以鐵錐、大如筋長尺餘、鑽頂而殺之、輕罪用杖、俗無文字、望月虧盈、以紀時節、候草藥枯、以爲年歲、

人深目長鼻、頗類於胡、亦有小慧、無君臣上下之節、拜伏之禮、父子同牀而寢、男子拔去鬚鬢、身上有毛之處、皆亦除去、婦人以墨黥手、爲蟲蛇之文、嫁娶以酒肴珠貝爲娉、或男女相悅、便相匹偶、婦人產乳、必食子衣、產後以火自灸、令汗出、五日便平復、以木槽中暴海水爲鹽、木汁爲酢、釀米麴爲酒、其味甚薄、食皆用手、偶得異味、先進尊者、凡有宴會、執酒者、必待呼名而後飲、上王酒者、亦呼王名、銜杯共飲、頗同突厥、歌呼蹋蹄、一人唱、衆皆和、音頗哀怨、扶女子上膊、搖手而舞、

其死者氣將絕、舉至庭、親賓哭泣相弔、浴其屍、以布帛纏之、裹以葦草、親土而殯、上不起墳、子爲父者、數月不食肉、南境風俗少異、人有死者、邑里共食之、

有熊·熊·豺·狼、尤多猪·雞、無牛·羊·驢·馬、厥田良沃、先以火燒、而引水灌之、持一插以石爲刃、長尺餘闊數寸、而墾之、土宜、稻·粱·[广禾]·黍·麻·豆·赤豆·胡豆·黑豆等、木有楓·栝·樟·松·榿·楠·杉·梓·竹·籐、果藥同於江表、風土氣候與嶺南相類、

俗事山海之神、祭以酒肴、鬬戰殺人、便將所殺人祭其神、或依茂樹起小屋、或

懸_二髑髏於樹上_一、以_レ箭射_レ之、或累_レ石繫_レ幡、以爲_二神主_一、王之所_レ居、壁下多聚_二髑髏_一以爲_レ佳、人間門戶上、必安_二獸頭骨角_一、

(六〇五年)
大業元年、海師何蠻等、每_二春秋二時_一、天清風靜、東望依_レ希、似_レ有_二煙霧之氣_一、亦不_レ知_二幾千里_一、三年、煬帝、令三羽騎尉朱寬入_レ海求_二訪異俗_一、何蠻言_レ之、遂與_レ蠻俱往、因到_二流求國_一、言不_二相通_一、掠_二一人_一而返、明年、帝、復令_二寬慰_二撫之_一、流求不_レ從、寬取_二其布甲_一而還、時、倭國使來朝、見_レ之曰、「此夷邪久國人所_レ用也」、帝、遣_二武賁郎將陳稜・朝請大夫張鎮州_一、率_レ兵自_二義安_一浮海擊_レ之、至_二高華嶼_一、又東行二日至[句厓][辟厓]嶼、又一日便至_二流求_一、初、稜、將_二南方諸國人_一從_レ軍、有_二崑崙人_一頗解_二其語_一、遣_レ人慰_二諭之_一、流求不_レ從、拒_二逆官軍_一、稜擊走_レ之、進至_二其都_一、頻戰皆敗、焚_二其宮室_一、虜_二其男女數千人_一、載_二軍實_一而還、自_レ爾遂絕、

○本條、長文タルニ依リ、便宜、改行ス、隋書卷七十、列伝第三十五、裴仁基ノ傳ニ、煬帝ノ南討流求ノ記アレドモ、略ス、隋書流求傳ヲ原據ノ一部トセル流求傳ニ、北史卷十二隋本紀下第十二、同卷八十八・列傳第六十六・陳稜、同卷九十四・列傳第八十二・流求國、通典卷一百八十六・邊防二・東夷下・流求、太平御覽卷七百八十四・四夷部五・東夷五・流求、太平寰宇記卷百七十五・四夷四・東夷四・流求、冊府元龜卷九百五十七・外臣部・土風・流求國及ビ宋史卷四百九十一・列傳卷第二百五十・外國七・流求國アレドモ、今、略ス、流求・瑠求ニ關ハル記、新唐書卷四十一・志第三十一・地理五・泉州清源郡割注、宋史卷百九十二・志第百四十五・兵六・鄉兵三及ビ元史卷二百十・列傳九十七・外夷三・瑠求ニ見ユ、隋書ニ記セル流求國、琉球國トセル説ト台灣島トセル説アリテ、尚、檢ズベシ、流求傳ノ註釋、山里純一『古代日本と南島の交流』參看、

○六〇八年、隋煬帝、流求國ニ使者ヲ遣ハス、尋デ、倭國遣隋使小野妹子、隋國使者ノ流求國ヨリ持チ歸リタル布甲ヲ、夷邪久國人所_レ用ト辨ズルコト、及ビ六一〇年二月、隋煬帝、陳稜并ニ張鎮州ヲ遣ハシテ流求國ヲ討ツコト、便宜合叙ス、倭國、小野妹子ヲ隋ニ遣ハスコトヲ記セル日本書紀及隋書略ス、

◎六一六年（日本推古天皇二十四年・隋大業十二年・丙子）

○三月、掖玖人、倭國ニ歸化ス、尋デ、五月及ビ七月、掖玖人、倭國ニ至ル、先後併セテ三十人ヲ、朴木ニ安置ス、

〔日本書紀〕卷二十二 推古天皇○日本古典文学大系

二十四年《○中略》三月、掖玖人三口歸化、夏五月、夜句人七口來之、秋七月、亦掖玖人二十口來之、先後并三十人、皆安_二置於朴井_一、未_レ及_レ還皆死焉、

◎六二〇年（日本推古天皇二十八年・唐武德三年・庚辰）

○八月、掖玖人、倭國伊豆島ニ漂到ス、

〔日本書紀〕卷二十二 推古天皇

二十八年八月、掖玖人二口、流_二來於伊豆島_一、

◎六二九年（日本舒明天皇元年・唐貞觀三年・己丑）

○四月一日、倭國、田部連ヲ掖玖ニ遣ハス、

〔日本書紀〕卷二十三 舒明天皇○日本古典文学大系

元年《○中略》夏四月辛未朔、遣_二田部連《闕名》於掖玖、

〔日本書紀〕卷二十三 舒明天皇

二年《○中略》九月《○中略》是月、田部連等至_レ自_二掖玖_一、

○六三〇年九月、倭國使田部連等、掖玖ヨリ歸國スルコト、便宜合叙ス、

◎六三一年（日本舒明天皇三年・唐貞觀四年・庚寅）

○二月十日、掖玖人、倭國ニ歸化ス、

〔日本書紀〕卷二十三 舒明天皇三年○日本古典文学大系
三年春二月辛卯朔庚子、掖玖人歸化、

◎六五三年（日本白雉四年・唐永徽四年・癸丑）

○七月、倭國遣唐使高田根麻呂等、薩摩ノ曲島ト竹島ノ間ニ遭難シ没ス、五人、神島ニ歸著ス、

〔日本書紀〕卷二十五 白雉四年○日本古典文学大系

秋七月、被_レ遣_二大唐_一使人高田根麻呂等、於_二薩麻之曲、竹島之間_一、合_レ船没死、唯有_二五人_一、繫_二胸一板_一、流_二遇竹島_一、不_レ知_レ所_レ計、五人之中、門部金採_レ竹爲_レ筏、泊_二于神島_一、凡此五人經六日六夜、而全不_レ食_レ飯、於_レ是、褒_二美金_一、進_レ位給_レ祿、

○倭國、遣唐使ヲ發遣スルコト、日本書紀卷二十五白雉四年五月十日條ニ見ユ、

◎六五七年（日本齊明天皇三年・唐顯慶二年・丁巳）

○七月三日、是日ヨリ先、觀貨邏國人、海見島ニ漂到シ、是日、筑紫ニ至ル、尋デ、倭國、觀貨邏國人ヲ驛ヲ以テ都ニ召シ、七月十五日、飛鳥寺ノ西ニ須彌山像ヲ作り孟蘭盆會ヲ設ケ、併セテ觀貨邏國人ヲ饗ス、

〔日本書紀〕卷二十六 齊明天皇三年○日本古典文学大系

三年秋七月丁亥朔己丑、觀貨邏國男二人、女四人、漂_二泊于筑紫_一、言、臣等初漂_二泊于海見島_一、乃以_レ驛召、辛丑、作_二須彌山像於飛鳥寺西_一、且設_二孟蘭盆會_一、暮饗_二觀貨邏人_一、《或本云、墮羅人、》

◎六五九年（日本齊明天皇五年・唐顯慶四年・己未）

○七月三日、倭國、唐ニ使者ヲ發遣ス、尋デ、九月十五日、石布連ノ乗船、南海ノ島爾加委ニ漂到シ、島人ニ滅セラル者アリ、

〔日本書紀〕卷二十六 齊明天皇五年○日本古典文学大系

秋七月朔丙子朔戊寅、遣_二小錦下坂合部連石布・大仙下津守連吉祥_一、使_二於唐國_一、仍以_二陸道奧蝦夷男女二人_一示_二唐天子_一、《高宗》伊吉連博德書曰、「同天皇之世、小錦下坂合部石布連・大山下津守吉祥連等_二船、奉_レ使_二吳唐之路_一、以_二己未年七月三日_一、發_二自難波三津之浦_一、八月十一日、發_二自筑紫六津之浦_一、九月十三日、行_二到百濟南畔之島_一、々名母分明、以_二十四日寅時_一、二船相從放_二出大海_一、十五日日入之時、石布連船橫遭_二逆風_一、漂_二到南海之島_一、々名爾加委、仍爲_二島人所_レ滅、便東漢長直阿利麻・坂合部連稻積等五人、盜_二乘島人之船_一、逃到_二括州_一、々県官人送_二到洛陽之京_一、》《○下略》

○南海之島爾加委、或ハ、キカイナラン、

◎六七七年（日本天武天皇六年・唐儀鳳二年・丁丑）

○二月、倭國、多禰島人等ヲ飛鳥寺ノ西ノ槻ノ下ニ饗ス、

〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇六年○日本古典文学大系

二月《○中略》是月、饗_二多禰島人等於飛鳥寺西槻下_一、

◎六七九年（日本天武天皇八年・唐調露元年・己卯）

○十一月二十三日、倭國、倭馬飼部造連ヲ大使ト爲シ多禰島ニ遣ハス、

〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇八年○日本古典文学大系

十一月《○中略》己亥、大乙下倭馬飼部造連爲_二大使_一、小乙下上村主光欠爲_二小使_一、遣_二多禰島_一、仍賜_二爵_一級、

◎六八一年（日本天武天皇十年・唐開耀元年・辛巳）

○八月二十日、倭國ヨリ多禰島ニ遣ハサ_レタル使人、多禰島人ヲ率ヒテ歸京シ、多禰國圖ヲ貢ジ、多禰島ノ風俗ヲ報ズ、尋デ、九月十四日、多禰島人ヲ飛鳥寺西河邊ニ饗ス、

〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇十年○日本古典文学大系

八月《○中略》丙戌、遣_二多禰島_一使人等、貢_二多禰國圖_一、其國去_レ京五千餘里、居_二筑紫南海中_一、切_レ髮草裳、梗稻常豐、一俎兩収、土毛、支子・莞子及種々海物等多、《○中略》九月《○中略》庚戌、饗_二多禰島人等於飛鳥寺西河邊_一、奏_二種種樂_一、

◎六八二年（日本天武天皇十一年・唐永淳元年・壬午）

○七月三日、隼人、倭國ニ來リテ方物ヲ貢ズ、是日、大隅隼人ト阿多隼人、朝廷ニ於テ相撲ヲ取ル、

〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇十一年○日本古典文学大系

秋七月壬辰朔甲午、隼人多來貢方物、是日、大隅隼人と阿多隼人、相撲於朝廷、大隅隼人勝之、

○隼人ノ史料、是歳ヨリ後、數多アレドモ、便宜、南島ニ關ハル記ノミヲ掲グ、

○七月二十五日、倭國、多禰人、掖玖人及ビ阿麻彌人ニ祿ヲ賜フ、

〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇十一年○日本古典文学大系

秋七月《○中略》丙辰、多禰人、掖玖人、阿麻彌人、賜祿各有差、

○本條ノ掖玖、多禰及ビ阿麻彌ト竝記サレタルニヨリ、屋久島ノ義ナラン、

◎六八三年（日本天武天皇十二年・唐弘道元年・癸未）

○三月十九日、倭國ヨリ多禰島ニ遣ハサレタル使者、歸著ス、

〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇十二年○日本古典文学大系

三月《○中略》丙午、遣多禰使人等返之、

◎六九五年（日本持統九年・唐嗣聖十二年・乙未）

○閏二月二十三日、倭國、使ヲ多禰ニ遣ハシテ、蠻ノ居スル所ヲ求メシム、

〔日本書紀〕卷三十 持統天皇九年○日本古典文学大系

閏二月《○中略》庚午、遣務廣貳文忌寸博勢・進広參下譯語諸田等於多禰、求蠻所居、

◎六九八年（日本文武天皇二年・唐嗣聖十五年・戊戌）

○四月十三日、倭國、文忌寸博士等ヲ使トシテ南嶋ニ遣ハシテ國ヲ覓ガシム、

〔続日本紀〕卷一 文武三年○新日本古典文学大系

夏四月《○中略》壬寅、遣務広貳文忌寸博士等八人于南嶋覓國、因給戎器、

◎六九九年（日本文武天皇三年・唐嗣聖十九年・己亥）

○七月十九日、多櫛・夜久・菴美・度感等人、倭國ニ使者ニ從ヒテ來貢ス、尋デ、八月八日、南嶋獻物ヲ伊勢大神宮及ビ諸社ニ奉ル、

〔続日本紀〕卷一 文武三年○新日本古典文学大系

秋七月辛未、多櫛・夜久・菴美・度感等人、從朝宰而來貢方物、授位賜物各有差、其度感嶋通^{（能之島）}中國、於是始矣、

〔続日本紀〕卷一 文武三年

八月己丑、奉南嶋獻物于伊勢大神宮及諸社、

○十一月四日 倭國ノ南嶋ニ覓國ニ遣ハシタル使文忌木博士等、歸著ス、

〔続日本紀〕卷一 文武三年○新日本古典文学大系

十一月《○中略》甲寅、文忌寸博士・刑部真木等、自南嶋至、進位各有差、

◎七〇〇年（日本文武四年・唐嗣聖十七年・庚子）

○六月三日、倭國文武天皇、先ニ遣ハシタル覓國使刑部真木等ヲ肥人ヲ率ヒテ剽劫シタル薩摩比賣、衣評督衣君縣、肝衝難波等ヲ、筑紫總領ニ勅シテ、決罰セシム、

〔続日本紀〕卷一 文武四年○新日本古典文学大系

六月庚辰、薩末比賣・久賣・波豆、衣評督衣君縣、助督衣君豆自美、又肝衝難波、從肥人等、持兵、剽劫覓國使刑部真木等、於是、勅竺志惣領、准犯決罰、

◎七〇二年（日本大宝二年・唐嗣聖十九年・壬寅）

○八月一日、日本、多櫛ヲ征討シ嶋司ヲ置ク、

〔続日本紀〕卷二 大宝二年○新日本古典文学大系

八月丙申朔、薩摩多櫛、隔化逆命、於是、發兵征討、遂校戸置吏焉、

○是歳ヨリ後、多禰島、南島ニ關ハル記ノミ採録ス、

◎七〇七年（日本慶雲四年・唐景龍元年・丁未）

○七月六日、日本、使ヲ大宰府ニ遣ハシテ、南嶋人ニ位ヲ授ケシム、

〔続日本紀〕卷四 慶雲四年○新日本古典文学大系

秋七月《○中略》辛丑、遣_二使於大宰府_一、授_二南嶋人位_一、賜_レ物各有_レ差、

◎七一四年（日本和銅七年・唐開元二年・甲寅）

○十二月五日、日本ノ使者太朝臣遠建治、南嶋ノ奄美・信覺及ビ球美嶋人ヲ率ヒテ、南嶋ヨリ歸著ス、

〔続日本紀〕卷六 和銅七年○新日本古典文学大系

十二月戊午、少初位下太朝臣遠建治等、率_二南嶋奄美・^{（石垣島）}信覺及^{（久米島）}球美等嶋人五十二人_一、至_レ自_二南嶋_一、

◎七一五年（日本靈龜元年・唐開元三年・乙卯）

○正月一日、日本元正天皇、大極殿ニ御シ朝ヲ受ク、南嶋ノ奄美・夜久・信覺・球美、方物ヲ貢ス、尋デ、正月七日、南嶋人ニ位ヲ授ク、

〔続日本紀〕卷六 靈龜元年○新日本古典文学大系

春正月甲申朔、天皇御_二大極殿_一受_レ朝、皇太子始加_二禮服_一拜朝、陸奥・出羽蝦夷并南嶋奄美・夜久・度感・信覺・球美等、來朝各貢_二方物_一、其儀、朱雀門左右、陣列鼓吹・騎兵、元會之日、用_二鉦鼓_一、自_レ是始矣、是日、東方慶雲見、遠江國獻_二白狐_一、丹波國獻_二白鴿_一、《○中略》戊戌、蝦夷及南嶋七十七人、授_レ位有_レ差、

◎七二〇年（日本養老四年・唐開元八年・庚申）

○十一月八日、日本、南嶋人百三十二人ニ位ヲ授ク、

〔続日本紀〕卷八 養老四年○新日本古典文学大系

十一月丙辰、南嶋人二百卅二人、授_レ位各有_レ差、懷_二遠人_一也、

◎七二七年（日本神龜四年・唐開元十五年・丁卯）

○十一月八日、日本、來朝シタル南嶋百三十二人ニ位ヲ授ク、

〔続日本紀〕卷十 神龜四年○新日本古典文学大系

十一月《○中略》乙巳、南嶋人百卅二人來朝、叙_レ位有_レ差、

◎七三八年（日本天平十年・唐開元二十六年・戊寅）

○是歲頃、古記、賦役令邊遠國條ニ夷人雜類ニ阿麻彌人アリト註ス、

〔令集解〕卷第十三 賦役一○新訂増補國史大系

凡邊遠國、有_二夷人雜類_一

《謂、夷者、夷狄、雜類者、亦夷之種類也、

釋云、夷、東夷也、舉_レ東而示_レ餘、推可_レ知、雜類、謂_二夷人之雜類_一耳、

古記云、夷人雜類、謂、毛人、肥人、阿麻彌人等類、問、夷人雜類、一歟、二歟、答、本一、末二、假令、隼人、毛人、本土、謂_二之夷人_一也、此等雜_二居華夏_一、謂_二之雜類_一也、一云、一種无_レ別、《

之所、應_レ輸_二調役_一者、隨_レ事斟酌量、不_二必同_二之華夏_一、

《謂、中国也、釈云、苞氏論語注云、諸夏中國、案、對_二夷之辭_一、夏音、胡雅反、

古記云、問、化外人投化復十年、復訖之後、課役同_二雜類_一以不、答、不_レ同也、華夏百姓一種也、

朱云、有_二夷人雜類條_一、會_二下復除條_一、所_レ讀、未_レ知_二其意_一何、若没落外蕃條歟、何者、令釋云故何、

穴云、所_レ謂、即夷人等應_レ輸也、餘放_二令釋_一、《○集解諸說、便宜、改行ス、》

◎七四八年（日本天平二十年・唐天寶七年・戊子）

○天平年間頃、日本大宰府ニ【木奄】美嶋及ビ伊藍嶋ヨリ貢ス、

〔大宰府不丁地区出土木簡〕○九州歴史資料館所蔵

【木奄】美嶋《○下闕ク、》

〔大宰府出土木簡〕○九州歴史資料館所蔵

伊藍嶋□□《○下闕ク、□□、竹五カ、》

◎七五二年（日本天平勝寶五年・唐天寶十二年・癸巳）

十一月二十一日、是ヨリ先、唐僧鑑眞等、日本遣唐使第三舟ニ乗リテ、唐蘇州黃洑浦ヲ發ス、是日、鑑眞等、阿兒奈波嶋ニ著シ、尋デ、十二月六日、阿兒奈波嶋ヲ發シ、二十日、日本薩摩國阿多郡秋妻屋浦ニ著シ、翌年二月四日、平城京ニ入り東大寺ニ安置サル、

〔唐大和尚東征傳〕○群書類從卷六十九

天寶十二載次癸巳十月十五日壬午、日本國使大使特進藤原朝臣清河・副使銀青光祿^(録)大夫光祿卿大伴宿禰胡麿・副使銀青光祿大夫祕書監吉備朝臣眞備・衛尉卿安倍朝臣朝衡等、來_二延光寺_一、白_二大和上_一云、「弟子等早知_下和上五遍渡海向_二日本國_一、將_上欲_レ傳_レ教、故今親奉_二顔色_一頂禮歡喜、弟子等先錄_二和上尊名并持律弟子五僧_一、已奏_二聞主上_一、向_二日本傳戒_一、主上、要_レ令_下將_二道士_一去_上、日本君王、先不_レ崇_二道士法_一、便奏留_二春桃原等四人_一、令_二住學_二道士法_一、爲_レ此、和上各亦奏退、願、和上自作_二方便_一、弟子等自有_下載_二國信物_一船四艘_上、行裝具足、去亦無_レ難」、時、大和上許諾已竟、《○中略》和上於_二天寶十二載十月二十九日戌時_一、從_二龍興寺_一出、至_二江頭_一乘_レ船下、《○中略》乘_レ船下、至_二蘇州黃洑浦_一、相隨弟子、楊州白塔寺僧法進、泉州超功寺僧曇靜、台州開元寺僧思託、楊州興雲寺僧義靜、衢州靈耀寺僧法載、賓州開元寺僧法成等一十四人、藤州通善寺尼智首等三人、楊州優婆塞潘仙童、胡國人安如寶、崑崙國人軍法力、騰波國人善聽、都二十四人、所_レ將如來肉舍利三千粒、《○佛像・經典等略ス、》已下皆進_二内裡_一、又阿育王塔樣金銅塔_區、廿三日庚寅、大使、處_二分大和上已下分乘_一、副使已下_レ舟畢、後大使已下、共議曰、「方今、廣陵郡大覺^(又)知和上向_二日本國_一、將欲_レ搜_レ舟、若被_レ搜得_レ爲_レ使有_レ妨、又風被_レ漂還_レ著_二唐界_一、不_レ免_二罪惡_一」、由_レ是、衆僧總下_レ舟留、十一月十日丁未夜、大伴副使竊招_二大和上及衆僧_一、納_二己舟_一、總不_レ令_レ知、十三日、普照師、從_二越餘姚郡_一來、乘_二吉備副使舟_一、十五日壬子、四舟同發、有_二一雉_一、飛_二第一舟前_一、仍下_レ訂留、十六日發、二十一日戊午、第一・第二兩舟、同到_二阿兒奈波嶋_一、在_二多禰嶋西南_一、第三舟、昨夜、已泊_二同處_一、十二月六日、南風起、第一舟、著_レ石不_レ動、第二舟、發_二向多禰_一去、七日、至_二益救嶋_一、十八日、自_二益救_一發、十九日、風雨大發、不_レ知_二四方_一、午時、浪上見_二山頂_一、二十日乙酉、午時、第二舟著_二薩摩國阿多郡秋妻屋浦_一、二十六日辛卯、延慶師、引_二和上_一入_二太宰府_一、天平勝寶六年甲午正月十一日丁未、副使從四位上大伴宿禰胡麿奏三大和上到_二筑志太宰府_一、二月一日、到_二難波_一、唐僧崇道等迎慰供養、三日、至_二河内國_一、大納言正二位藤原朝臣仲麿、遣_レ使迎慰、復有道璿律師、遣_二弟子僧善談等_一迎勞、復有_二高行僧志忠・賢璟・靈福・曉貴等卅餘人_一、迎來禮謁、□□四日、入_レ京、敕、遣三正四位下安宿王於_二羅城門外_一迎慰拜勞、引_二入東大寺_一安置、《○下略、便宜、年ヲ以テ改行ス、》

〔続日本紀〕卷十九 天平勝寶六年

正月《○中略》壬子、《○中略》入唐副使從四位上大伴宿禰古麻呂來歸、唐僧鑑眞・法進等八人隨而歸朝、癸丑、大宰府奏、入唐副使從四位上吉備朝臣眞備船、以二去年十二月七日_(十六日)、來_二著益久嶋_一、自_レ是之後、自_二益久嶋_一進發、漂蕩著_二紀伊國牟漏埼_一、《○中略》三月癸丑、大宰府言、遣_レ使尋_二訪入唐第一船_一、其消息云、第一船、舉_レ帆指_二奄美嶋_一發去、未_レ知_二其著處_一、《○中略》四月《○中略》癸未、大宰府言、入唐第四船判官正六位上布勢朝臣人主等、來泊_二薩摩國石籬浦_一、

○十二月六日ヨリ後、遣唐使第一船、阿兒奈波嶋ヨリ奄美嶋ヲ指シテ發ト傳フレドモ、行方知レザルコト、便宜合叙ス、

◎七五四年(日本天平勝寶六年・唐天寶十三年・甲午)

○二月二十日、是ヨリ先、天平七年(七三五年)、日本大宰府、高橋連牛養ヲ南嶋ニ遣ハシテ牌ヲ樹タシム、是日、孝謙天皇、大宰府ニ勅シテ、牌ヲ修樹シ、嶋名、船舶、水有ル處、國ヨリ去就ノ行程等ヲ書セシム、

〔続日本紀〕卷十九 天平勝寶六年○新訂増補國史大系

二月《○中略》丙戌、勅_二大宰府_一曰、「去天平七年、故大貳從四位下小野朝臣老、遣_二高橋連牛養於南嶋_一樹_レ牌、而其牌經_レ年、今既朽壞、宜_二依_レ舊修樹_一、每_レ牌、顯_下著嶋名并泊_レ船處、有_レ水處、及去_二就國_一行程、遙見嶋名_上、令_二漂著之船知_レ所_一歸向_一」、

○三月十七日、日本大宰府、使ヲ遣ハシテ遣唐使第_二船ヲ尋訪スルニ、奄美島ヲ指シテ發去シタルニソノ著シタル處ハ知レズト報ズ、

〔続日本紀〕卷十九 天平勝寶六年○新訂増補國史大系

三月《○中略》癸丑、大宰府言、「遣_レ使尋_二訪入唐第一船_一、其消息云、「第一船、舉_レ帆指_二奄美嶋_一發去、未_レ知_二其著處_一」」、

◎八〇四年（日本延暦二十三年・唐貞元二十年・甲申）

○十月三日、日本遣唐大使藤原朝臣葛野麻呂、唐福州ニ到リ、福州觀察使兼福州刺史閻濟美ニ處分ヲ請フ、是ノ時、入唐留學僧空海、遣唐大使ノ福州觀察使兼福州刺史ニ呈シタル書ヲ作り、留求ニツキテ記ス、

〔日本後紀〕卷十二 延暦二十四年○新訂増補國史大系

六月^(八日)乙巳、遣唐使第一船、到_二泊對馬島下縣郡_一、大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂上奏言、「臣葛野麻呂等、去年七月六日、發_レ從_二肥前國松浦郡田浦_一、四船入海、七日戊剋、第三・第四兩船、火信不_レ應、出_二入死生_一之間、掣_二曳波濤之上_一、都卅四箇日、八月十日、到_二福州長溪縣赤岸鎮_一南海口、時、杜寧縣令胡延沂等相迎、語云、「常州刺史柳冕、緣_レ病去_レ任、新除_二刺史_一未_レ來」、国家大平者、其向_レ州之路、山谷嶮隘、担行不_レ穩、因廻_レ船向_レ州、十月三日、到_レ州、新除觀察使兼刺史閻濟美處分、且奏、且放_二廿三人_一入京、十一月三日、臣等發赴_二上都_一、此州去_レ京七千五百廿里、星發星宿、晨昏兼行、十二月廿一日、到_二上都長樂驛宿_一、廿三日、内使趙忠、將_二飛龍家細馬廿三匹_一迎來、兼持_二酒脯_一宣慰、駕即入_二京城_一、於_二外宅_一安置供給」《○下略》

〔遍照發揮性靈集〕卷五○弘法大師全集

爲_二大使與_二福州觀察使_一書

^(葛野麻呂)

賀_二能啓_一、高山澹默、禽獸不_レ告_レ勞而投歸、深水不_レ言、魚龍不_レ憚_レ倦而逐赴、故能西羌梯_レ險、貢_二垂衣君_一、南裔航_レ深、獻_二刑厝帝_一、誠是、明知_二艱難之亡_一身、然猶忘_二命德化之遠及_一者也、伏惟、大唐聖朝、霜露攸_レ均、皇王宜_レ宅、明王繼_レ武、聖帝重興、掩_二頓九野_一、牢_二籠八紘_一、是以、我日本國、常見_二風雨和順_一、定知、中国有_レ聖、剝_二巨楡於蒼嶺_一、摘_二皇華於丹墀_一、執_二蓬萊琛_一、獻_二崑岳玉_一、起_レ昔迄_レ今、相續不_レ絕、故、今我國主、顧_二先祖之貽謀_一、慕_二今帝之德化_一、謹差_二大政官右大辨正三品兼行越前國太守藤原賀能等_一充_二使_一、奉_二獻國信・別貢等物_一、賀能等忘_レ身銜_レ命、冒_レ死入_レ海、既辭_二本涯_一、比_レ及_二中途_一、暴雨穿_レ帆、戕風折_レ柁、高波沃_レ漠、短舟裔裔、飄風朝扇、摧_二肝耽羅之狼心_一、北氣夕發、失_二膽留求之虎性_一、嘖_二變猛風_一、待_二葬鼃口_一、攢_二眉驚汰_一、占_二宅鯨腹_一、隨_二浪昇沈_一、任_二風南北_一、但見_二天水之碧色_一、豈視_二山谷之白霧_一、掣_二掣波上_一二月有餘、水盡人疲、海長陸遠、飛_レ虛脫_レ翼、泳_レ水殺_レ鱗、何足_レ爲_レ喻哉、僅八月初日、乍見_二雲峯_一、欣悅罔_レ極、過_二赤子之得_一母、越_二旱苗之遇_一霖、賀能等、萬冒_二死波_一、再見_二生日_一、德之所_レ致也、非_二我力之所_一能也、又大唐之遇_二日本_一也、雖_レ云下八狄雲會、膝_二步高臺_一、七戎霧合稽中顙魏闕上、而於_二我國使_一也、殊私曲成、待以_二上客_一、面對_二龍顏_一、自承_二鸞綸_一、佳問榮寵、已過_二望外_一、與_二夫瑣瑣諸蕃_一、豈同日可_レ論乎、又竹符・銅契、本備_二姦詐_一、世淳人質、文契何用、是故、我國、淳樸已降、常事_二好隣_一、所_レ獻信物、不_レ用_二印書_一、所_レ遣使人、無_レ有_二姦僞_一、相_二襲其風_一、于_レ今無_レ盡、加以、使乎之人、必擇_二腹心_一、任以_二腹心_一、何更用_レ契、載籍所_レ傳、東方有_レ國、其人懇直、禮義之鄉、君子之國、蓋爲_レ此歟、然今、州使責以_二文書_一、疑_二彼腹心_一、檢_二括船上_一、計_二數公私_一、斯乃理合_二法令_一、事得_二道理_一、官吏之道、實是可_レ然、雖_レ然、遠人乍到、觸_レ途多_レ憂、海中之愁、猶委_二胸臆_一、德酒之味、未_レ飽_二心腹_一、率然禁制、手足無_レ厝、又建中以往入朝使船、直着_二楊・蘇_一、無_二漂蕩之苦_一、州縣諸司、慰勞慇懃、左右任_レ使、不_レ檢_二船物_一、今則事與_レ昔異、遇將_レ望疎、底下愚人、竊懷_二驚恨_一、伏願、垂_二柔遠之惠_一、顧_二好隣之義_一、縱_二其習俗_一、不_レ怪_二常風_一、然則、涓涓百蠻、與_二流水_一而、朝_二宗舜海_一、喁喁萬服、將_二葵藿_一、以引_二領堯日_一、順_二風之人_一、甘心逼湊、遂_レ腥之蟻、悅_レ意駢羅、今不_レ任_二常習之小願_一、奉啓不宣、謹言、

○本狀、年月日闕ク、續群書類從所収寛平七年三月十日聖寶撰贈大僧正空海和上傳記ニ、十月十三日與書福州觀察使トアリ、

◎八二四年（日本天長元年・唐長慶四年・甲辰）

○十月一日、日本、多檟島司ヲ停メ、大隅國ニ隸カシム、

〔日本紀略〕第五十三代 淳和天皇 天長元年○新訂増補國史大系

冬十月丙子朔、停_二多檟島司_一、隸_二大隅國_一、

〔類聚三代格〕卷五 分置諸国事○新訂増補國史大系

太政官謹奏

停_二多禰島_一隸_二大隅國_一事

右、參議大宰大貳從四位下小野朝臣峯守等解稱、「謹檢_二案内_一、太政官去二月十一日符稱、「件島南居_二海中_一、人兵乏弱、在_二於國家、良非_二扞城_一、又嶋司一年給物准_二稻三萬六千餘束_一、其島貢調鹿皮一百餘領、更無_二別物_一、可_レ謂_二有_レ名無_レ實多_レ損少_レ益_一」^(藤原冬嗣)、右大臣宣、「奉_レ勅、宜_下勘_二利害_一言_上」者、南溟森々、無_レ國無_レ敵、有_レ損無_レ益、如_二符旨_一、須_二停_二島隸_二大隅國_一、計_二其課口_一、不_レ足_二一鄉_一、量其土地、有_レ餘_二一郡_一、能滿合_二於馭謨_一、益求合_二於熊毛_一、四郡爲_二二_一、於_レ事得_レ便_一者、聖帝、登_レ樞事、期_二濟_二世、明王、布_レ政理貴_レ適_レ時、臣等商量、昔漢元帝、納_二賈捐之言_一、罷_二珠崖郡_一、雖_二建_二國置_二壘非_二無_二分野_一、而卹_二民救_二急、猶弃_二州郡_一、况溟海之外、費損如_レ此、加以、往還之吏、漂亡者多、運送之民、蕩沒不_レ少、守_二無益之地_一、損_二有用之物_一、求_二之政典_一、深迂_二物議_一、伏望、依_レ件、停隸以省_二邊弊_一、伏聽_二天裁_一、謹以申聞謹奏、聞、

天長元年九月三日

○多禰島司ヲ停メ大隅國ニ隸カシムルコトヲ奏上シタル天長元年九月三日太政官奏、都良香作ニ依リテ、本朝文粹卷四及ビ朝野群載卷六ニ收ムレドモ、略ス、

◎八三六年（日本承和三年・唐開成元年・丙辰）

○八月二十日、是日ヨリ先、七月二十日、日本大宰府、遣唐使第三舶水主、對馬嶋ニ漂到シタルコトヲ飛驒シテ朝廷ニ奏ス、是日、大宰府、遣唐使第三舶ニ乘リタル眞言請益僧眞濟等、南嶋ニ漂到シ、日本ニ歸著シタルコト奏ス、

〔続日本後紀〕卷五 承和三年○新訂増補國史大系

八月戊戌朔、大宰府馳駟、奏_下遣唐使第三舶水手等十六人駕_二編板_一漂着之状_上、^(三日)己亥、勅、符_二遣唐大使藤原朝臣常嗣_一、「省_二大宰府去月廿日飛駟奏言_一、第三舶水脚十六人、編板如_レ桴、駕_レ之、漂_二着對馬島南浦_一、其水脚等申云、「舶、實依_レ數解散者、翻水不_レ収、悔而何及」、言念_二災變_一、永用_二憫傷_一、又案_二同府別奏言_一、彫弊未_レ復、旱疫相仍、使人等六百有餘不_レ堪_二供給_一、伏望、准_二寶字・寶龜例_一、使人入_レ京、水脚還_レ鄉、又留_二判官・録事各一人_一、與_二府司共修_二造破舶_一」者、竝依_二來奏_一、使等宜_下知_二此情_一、判官已下、至_二于水手_一、惣自_二舟途_一入京還_上堵、脫有_下不_レ欲_二更入_二都者_一、隨_レ願駐_レ之、但大使・副使、去留任_レ意、其縁_二修造事_一、應_レ留_二判官并録事_一者、任_二大使之簡定_一、^(四日)辛丑、遣唐第三舶人九人、駕_レ桴、漂_二着肥前國_一、^(八日)乙巳、勅曰、「遣唐第三舶、未_レ遂_二利涉_一、半途漂損、纔乘_レ桴所_レ着使下之徒廿有五人、漂着之後、已經_二旬日_一、而判官・録事・史生・知乗船事等惣一百餘人、未_レ知_二所_レ去、存亡難_レ量、宜_下仰_二大宰府_一、差_二海邊諳路之人_一、遣_二絶島無人之處_一、漂損人物一向尋覓、募以_二穀帛_一」^{>(二十日)}、《○中略》丁巳《○中略》是日、大宰府奏言、「問_二遣唐第三舶漂蕩之由_一、眞言請益僧眞濟等、僅作_レ書答云、「舵折棚落、潮溢人溺、船頭已下百冊餘人、任_レ波漂蕩、爰船頭判官丹墀文雄議云、「我等、空渴_二死船上_一、不_レ如、壞_二船作_二筏_一」、各乘覓_レ水、録事已下、爭放_二取甲板_一、造_レ桴各去、自外无_二復所_一言_一」、

〔日本三代實録〕卷四 貞觀_二年_一（八六〇年）○新訂増補國史大系

二月《○中略》廿五日丙午、僧正傳燈大法師位眞濟卒、眞濟者、俗姓紀朝臣、左京人也、祖正五位下田長、父巡察彈正正六位上御園、眞濟、少年出家、學_二大乘道_一、通_二外傳_一、夙有_二識悟_一、從_二大僧都空海_一、受_二眞言教_一、大師海公鑒_二其器量_一、特加_二提誘_一、遂授_二兩部大法_一、爲_二傳法阿闍梨_一、眞濟、時年廿五、時人奇_レ之、眞濟、入_二愛當護山高尾峰_一、不_レ出十二年、嵯峨天皇、聞_二其苦行_一、爲_二内供奉十禪師_一、承和之初、遣_レ使聘_レ唐、眞濟、奉_二朝命_一、隨_レ使渡海、中途漂蕩、船舶破裂、眞濟、纔駕_二一筏_一、隨_レ波而去、泛々然不_レ知_二所_レ到、凡在_二海上_一廿三日、其同乘者卅餘人、皆悉餓死、所_レ活者、眞濟與_二弟子眞然_一二人而已、眞濟唯佛是念、自然不_レ飢、豈非_二如來冥護之所_一致哉、南嶋人遙望_二海中_一、每_レ夜有_レ光、怪而尋_レ之、拯得_レ着_レ岸、皮膚腐爛、尸居不_レ動、嶋人憐愍、収而養療、遂得_レ歸_二本朝_一、仁明天皇、擢爲_二權律師_一、文德天皇、甚見_二尊重_一、爲_二權少僧都_一、未_レ幾、轉_二權大僧都_一、少頃、爲_二僧正_一、於_レ是、眞濟抗_レ表、請_下以_二僧正位_一讓_下先師空海_上、中心懇切、至_二于再三_一、天皇感激、贈_二空海法師_一、以_二大僧正位_一、緇徒榮_レ之、眞濟表請、建_二一重寶塔於高尾岑神護寺_一、造_二五大虚空藏菩薩像_一、安_二置塔中_一、置_二七口僧僧及度年分三人_一、春秋二季、永設_二法會_一、轉_二讀虚空藏十輪等經_一、以_二鎮_二護國家_一也、守_二其遺跡_一、至_レ今修_レ之、^(八五八年)天安二年八月、文德天皇、寢_レ病、眞濟、侍_二看病於冷然院_一、大漸之夕、時論噉々、眞濟失_二志隱居_一、遷化、時

年六十一、

○眞濟ノ乗リタル遣唐使第三船漂蕩シタル時、同船水主、對馬嶋ニ漂著ストアレドモ、眞濟、南嶋ニ漂到シタルコト、其ノ傳ニ據リテ掲グ、日本、仁明天皇、遣唐使ヲ任ズルコト続日本後紀承和元年正月庚午十九日ノ條ニ、仁明天皇、遣唐大使藤原朝臣常嗣ニ節刀ヲ授クルコト同承和三年四月丁酉二十九日ノ條ニ、七月二日、遣唐使發船ノコト、同承和三年七月壬午十五日ノ條ニ、大宰府飛驒シテ遣唐使第二船漂廻ヲ奏スルコト同承和三年七月辛卯二十四日ノ條ニ、七月十日、大宰府飛驒シテ遣唐使第一船并ニ第四船、肥前國ニ漂廻シタルヲ奏シタルコト同承和三年七月癸未十六日并甲申二十七日ノ條ニ、七月二十日、大宰府飛驒シテ遣唐使第三船、對馬嶋ニ漂到シタルヲ奏シタルコト同承和三年八月戊戌朔日條并ニ同己亥二日條ニ見ユ、

◎八四〇年（日本承和七年・唐開成五年・庚申）

○六月五日、是日ヨリ先、四月八日、日本大宰府、去年八月、南海賊地ニ漂到シタル遣唐使第二船知乘船事菅原朝臣梶成ノ大隅國ニ廻著シタルコトヲ飛驒シテ上リタル奏狀、朝廷ニ著シタルニ依リ、四月十五日、仁明天皇、大宰大貳等ニ勅シテ矜恤セシム、是日、菅原朝臣梶成等、都ニ歸著ス、梶成等、南海ノ賊ト相戦ヒテ得タル兵器、中國ニ似ズトス、尋デ、七月二十六日、仁明天皇、出羽國飽海郡大物忌神ニ宣命シ、遣唐使第二船人ノ南海ニ於ケル戦ニ神助ヲ賜リタルコトヲ謝ス、

〔続日本後紀〕卷九 承和七年○新訂増補國史大系

三月丁丑朔^(三日)己卯、勅、遣唐三箇船、去年夏六月進發、今諸船廻來、稍經_二年月_一、伺候之事、恐有_二懈怠_一、宜_レ命_二大宰府及縁海諸國_一、爲_レ未_二廻來_一第二船上、依_レ例舉_レ火候_甲之、

〔続日本後紀〕卷九 承和七年○新訂増補國史大系

夏四月^(八日)《○中略》癸丑、《○中略》大宰府上奏、遣唐知乘船事菅原梶成等所_レ駕第二船、廻_二著於大隅國_一、《○中略》^(十五日)庚申、勅、符_二大宰大貳從四位上南淵朝臣永河・少貳從五位下文屋朝臣真屋等_一、得_二今月八日飛驒奏狀_一、知_二遣唐知乘船事菅原梶成等分駕一隻小船廻_一着大隅國海畔、梶成等漂_二異域_一、萬死更生、言念_二苦節_一、誠可_二矜恤_一、迄_二于入_レ都、依_レ舊勞來、量賜_二帛_一、以資_二衣裳_一、又准判官良峰長松所_レ駕之船、全否未_レ期、鬱陶_二于懷_一、宜_レ逾_二戒邊面_一、無_レ絶_中候_上、若有_二來著_一、俾_レ得_二安穩_一、《○中略》六月^(五日)《○中略》己酉、《○中略》遣唐第二船知乘船事_二正六位上菅原朝臣梶成等、海中遇_二造風_一、漂_二著南海賊地_一、相戦之時、所_レ得兵器、五尺鋒一枚、片蓋鞘横佩一柄、箭一隻、齎來獻_レ之、竝不_レ以_二中國兵仗_一、《○中略》^(十八日)壬戌、《○中略》大宰府馳駢奏、遣唐第二船准判官從六位下良岑朝臣長松等廻_二着大隅國_一、《○中略》七月^(二十六日)己亥、奉_レ授_二出羽國飽海郡正五位下勳五等大物忌神從四位下_一、餘如_レ故、兼充_二神封二戸_一、詔曰、「天皇我詔旨尔坐、大物忌大神尔申賜波久、頃皇朝尔縁_レ有_二物怪_一天卜詢尔、大神爲_レ崇賜倍利、加以、遣唐使第二船人等廻來申久、「去年八月尔南賊境尔漂落互相戦時、彼衆、我寡互、力甚不_レ敵奈利、儻而克_レ敵留波、似_レ有_二神助_一」止申、今依_二此事_一互臆量尔、去年、出羽國言上太留、「大神乃於_二雲裏_一互、十日間作_二戦聲_一後尔、石兵零利」止申世利之月日、與_二彼南海戦_一間、正是符契世利、大神乃威稜、令_二遠被_一太留事乎、且奉_二驚異_一、且奉_二歎喜_一、故以_二從四位爵_一乎奉_レ授、兩戸之封奉_レ充良久乎申賜波久止申、

〔日本三代實録〕卷十一 貞觀七年（八六五年）○新訂増補國史大系

十月《○中略》二十六日甲戌、雅樂權大允外從五位下和述部宿禰大田麻呂卒、大田麻呂者右京人也、吹笛出身、備_二於伶官_一、始師_二事雅樂權少屬外從五位下良枝宿禰清上_一、受_二學吹笛_一、清上特善_二吹笛_一、音律調弄、皆窮_二其妙_一、見_二大田麻呂有_二氣骨_一、可_レ數習、因加_レ意而教_レ之、承和之初、清上從_二聘唐使_一、入_二於大唐_一、歸朝之日、船遭_二逆風_一、漂墮_二南海賊地_一、爲_レ賊所_レ殺、本姓大戸首、河内國人也、大田麻呂、能受_二其道_一、莫_レ不_二精究_一、天長初、任_二雅樂百濟笛師_一、尋轉_二唐笛師_一、數年爲_二雅樂少屬_一、俄轉_二大屬_一、齊衡三年、除_二權大允_一、貞觀三年正月廿一日、授_二外從五位下_一、是日內宴也、大田麻呂伎術出_レ群、故加_レ殊、大田麻呂、本姓和述部、後賜_二宿禰_一、卒時年六十八、

〔日本三代實録〕卷三十六 元慶三年（八七九年）○新訂増補國史大系

十一月《○中略》十日乙丑、散位從四位上良岑朝臣長松卒、長松者、大納言贈從二位安世之子也、承和之初、爲_二常陸權大掾_一、俄先爲_二伊予掾_一、兼爲_二遣唐使准判官_一、聘禮既訖、歸舶解纜、遭_レ風漂_二墮南海賊地_一、殆致_レ殞_レ命、

僅以得_レ還、同七年、授_二從五位下_一、數年、拜_二侍從_一、尋加_二從五位上_一、遷_二丹波介_一、後進_二正五位下_一、俄而遷_二縫殿頭_一、遂至_二從四位下_一、未_レ幾、加_二從四位上_一、遷_二宮内大輔_一、累遷_二諸陵頭_一、武藏・大和、河内・山城等國守、長松無_二他才能_一、以善_二彈琴_一、拜_二聘唐使_一、卒時年六十六、

○良枝宿禰清上、唐ヨリノ歸路、南海賊地ニ漂到シ賊ニ殺サルコト、及ビ良岑朝臣長松、唐ヨリノ歸路、南海賊地ニ漂到シ、歸國スルコト、便宜合敘ス、

◎八五三年（日本仁壽三年・唐大中七年・癸酉）

○八月十四日、日本天台僧圓珍、唐ニ渡ラントシテ、流求國ノ傍ニ至リ、尋デ、八月十五日、唐福州連江縣ニ著ス、〔太政官給公驗牒〕○園城寺文書第一卷 園城寺編
太政官

十禪師延曆寺傳燈大法師位圓珍《年五十三臈卅四》

右、圓珍奏狀稱、「《○中略》嘉祥四年四月十五日、辭_レ京、輦向_二太宰府_一、五月廿四日、得達_二前處_一、以_レ無_二便船_一、暫寄_二住城山四王院_一、《○中略》至_二壽_一二年閏八月、值_二大唐商人欽良暉交關船來_一、三年七月十六日、上船、到_二值嘉嶋_一、停_二泊鳴浦_一、八月初九日、放船入海、十三日、申時、望_二見高山_一、緣_二北風煞_一、十四日、辰頭、漂_二到彼山脚_一、所_レ謂、流求國、喫_レ人之地、四方無風、莫_レ知_レ所_レ趣、忽遇_二巽風_一、指_レ乾維行、申尅、見_二小山_一、子夜至止_二脚下_一、十五日、午、遂獲_二着岸_一、而未_レ知_二何國界_一、便問_レ所_レ在、知_二此大唐國嶺南道福州連江縣界_一、于_レ時、國号_二大中七年_一矣、合_レ船喜躍、如_二死得_レ蘇_一、《○中略》謹具_二求法來由_一、伏聽_二天裁_一」者、右大臣宣、「奉_レ勅、「如_レ聞、《○中略》宜依_レ所_レ陳、下_二知所司_一、許_二其演說_一、增_二光慧炬_一」者、今依_二宣旨_一、与_二之公驗_一」、

貞觀八年五月廿九日正六位上行左少史刑部造「真鯨」

參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南溟朝臣「年名」《○「天皇御璽」朱印一二九顆踏ス、》

「此公驗、印後入手、而一兩字、頗以_レ不_レ正、更書_二斐紙_一、再請_二内印_一、事須_二毀_レ先留_二後印_一、緣_二此本印迹分明_一、後本不_レ及、請_二史官_一、留_二之雙存_一、圓珍手記」《○圓珍筆》

○本太政官牒、先本ト稱サル、圓珍ノ唐ヘノ渡航ノ記、園城寺所藏時原春風筆後本、圓珍自筆本貞觀五年三月七日圓珍請傳法公驗奏狀案《○紙背ニ同文アリ、》及ビ圓珍自筆本貞觀五年十一月十三日圓珍請傳法公驗奏狀案、異事ナシ、マタ、三善清行撰天台宗延曆寺座主圓珍和尚傳、異事ナシ、圓珍ノ近付キタル流求國、福州ノ近傍タルニ據レバ、琉球ニ非ザレドモ掲ゲ、圓珍、琉球國ニ漂著シ、琉球國ヲ人ヲ食フ所ト記セル傳承、今昔物語集卷十一、智證大師亘唐傳顯密法歸來語第十二ニ見ユ、

◎九一〇年（日本延喜十年・唐開平四年・庚午）

○是歲、惟宗公方、本朝月令ヲ撰シ、南島人ノ嚼ニヨル釀酒ヲ、日本決釋ニ據リテ記ス、

〔本朝月令〕○群書類從 公事部 卷八十一

六月

朔日、内膳司、供_二忌火御飯_一事、

《○中略》

同日、造酒正、献_二醴酒_一事、《起_二六月_一、盡_二七月_一、》

日本紀神代云、于_レ時、神吾田鹿葦津姫、以_二定田_一、號曰_二狹名田_一、以_二其田稻_一、釀_二天甜酒_一嘗_レ之、又用_二淳浪田稻_一、爲_レ飯嘗_レ之、日本決釋云、應神天皇之代、百濟人須曾己利《人名、酒公、》參來、始習_二造酒之事_一、以往之世、未_レ知_二釀酒之道_一、但殊有_二造酒之法_一、上古代、口中嚼_レ米、吐_二納木櫛_一、經_レ日酣酸、名_レ之爲_レ醴、故今世、謂_二釀_レ酒_一、爲_レ嚼、是其法也、《今、南島人、所_レ爲_レ如_レ此、》古事記云、品陀天皇之代、於_二吉野之白檮上_一、作_二橫臼_一而、於_二其橫臼_一、釀_二大御酒_一、獻_二其大御酒_一之時、擊_二口鼓_一爲_レ伎、而歌曰、加志能布邇、余久須袁都久理、余久須邇、迦美斯意富美岐、宇麻良邇、岐許志母知遠勢、麻呂賀知、職員令、造酒司、造酒正、掌_二釀_レ酒醴酢_一、《謂、醴、甜酒、》〔古事記裏書〕○古典保存會刊神宮文庫所藏本

○釀_二日本決釋云、應神天皇之代、百濟人須曾己利^{スソコリ}《人名、酒工、》參來、始習_二造酒之事_一、以往之世、未_レ知_二釀酒之道_一、

但殊有_二造酒之法_一、上古之代、口中嚼_レ米、吐_二^{ハキ}納木櫓^{ケル}_一、經_レ日釀^{アマクムシ}酣^{カム}釀、名_レ之爲_レ醴、故今世、謂_レ釀_レ酒、爲_レ嚼、是其法也、《今、南島人、所_レ爲_レ如_レ此、》《○原本ノ返點略ス、原本ノ訓假名、傍訓ノ外ハ略ス、返點、編者ニ依リテ附ス、本書、古事記上卷ノ裏書云ノ段ノ末ニ、已上古事記上卷ノ裏書之応永三十一年甲辰七月五日以尾崎坊之本書寫了沙彌道祥(花押)ノ書寫奥書、古事記二卷裏書ノ段ノ末ニ、文永十年二月十四日巳刻 兼文註之ノト部兼文ノ本奥書アリ、》

◎九二七年(日本延長五年・後唐天成二年・丁亥)

○十二月二十六日、日本、左大臣藤原朝臣忠平等、延喜式ヲ奏進ス、延喜式ニ、南嶋赤木貢進、奄美譯語、南嶋樹牌ヲ定ム、

〔延喜式〕卷二十三 民部下○新訂増補國史大系

年料別貢雜物、《○中略》太宰府、《○中略》、《赤木南嶋所_レ進、其數隨_レ得、》

〔延喜式〕卷三十 大藏省

諸使給法

入諸蕃使《○中略》入唐大使、《○中略》新羅・奄美等譯語《○中略》、《各施四疋。綿廿屯。布十三端、》《○中略》、臨_レ入_レ京給、其別賜、大使、《○中略》訳語、《各彩帛五疋。質布二端、》《○下略》

〔延喜式〕卷五十 雜式○新訂増補國史大系

凡太宰、於_二南嶋_一樹_レ牌、具顯_下著嶋名及泊船處、有_レ水處、并去_二就國_一行程、遙見嶋名_上、仍令_下漂著船人必知_上有_レ所_二歸向_一、

○延喜式、右ニ掲ゲタル條文ノ外ニ、卷十二内記・装束位記式ニ赤木軸、同・五位已上位記料雜物ニ赤木、卷十四内藏寮・諸國年料供進條ニ太宰府所進ノ赤木・檳榔馬蓑、同・年中所造御梳條ニ由志木、卷十七内匠寮・内記局所請位記料條ニ赤木軸、卷二十一治部省・上瑞條ニ南海輪ス青烏ナド、南島ニ關ハルコトヲ記セル條アレドモ、今、略ス、

◎九九七年(日本長徳三年・宋至道三年・丁酉)

○十月一日、日本大宰府、是日ヨリ先、奄美嶋人ノ薩摩國・大隅國・肥後國・肥前國・壹岐嶋ニ亂入シタルコトヲ飛驒奏上ス、諸卿、大宰府式ニ要害ヲ警固シ追捕セシメムコトヲ命ズルコト、併セテ佛神ニ祈禱スベキコトヲ定メ申ス、尋デ、二日、一條天皇、諸卿定申ニ依リテ行フベキヲ仰ス、

〔小右記〕長徳三年○大日本古記録

句事出御南殿事儀

十月一日、壬辰、可_レ御_二南殿_一云々、《○中略》有_二廚御贊_一、《○中略》獻畢間、左近陣官高聲曰、「自_二大宰_一飛驒到來云、高麗國人虜_二掠對馬・壹岐島_一、又着_二肥前國_一、欲_二虜領_一」云々、上下驚駭、三兼相失_レ度、降日來階而案内、兼披_二^(藤原有國)大貳書狀_一、上達部進向_二丞相所_一、太以周章、雖_レ云_二非常事_一、於_二階下_一三丞相披_二讀都督書_一、不_レ足_レ言、下官不_レ起_二座_一、丞相復座云、「奄美嶋者、燒_二亡海夫等宅_一、奪_二取財物_一、又執_二載男女於舟_一將去、尚浮_二海上_一成_レ犯之由云々、飛驒言上_二者_一、《○中略》

高麗國人濫行事、付朔日依急事、雖凶事不憚事、有僉儀、○次段頭書

左大臣以下着_二陣座_一、右大臣云云、「今日朔日、奏_二凶事_一事、無_二便宜_一歟」者、余云、飛驒言上、是至急事事也、不_レ可_レ隔_二時者_一、何矧選_二吉日_一乎」、諸卿應_レ之、仍左大臣召_二^(藤原顯光)大外記致時^(中原)、召_二飛驒解文_一、々匣二合盛_一覽莒_一、奉_二上卿_一、一匣者注_レ奏、一匣者注_レ解文、督令_レ披_二莒_一、但至_二於飛驒解文_一不_レ披_レ封、至_二例解文_一披_レ封見也、左大臣參上令_レ奏、良久之後復座、下給大宰^(符)言上解文等、令_二諸卿定申_一、奄美嶋者、乘_レ船帶_二兵具_一、掠_二奪國嶋海夫_一、筑前・筑後・薩摩・壹岐・對馬、或煞害、或放火、奪_二取人物_一、多浮_二海上_一、又爲_二當國人於處々合戰_一之間、奄美人、中_レ矢亦有_二其數_一、但當國人多被_二奪取_一、已及_二三百人_一、符解文云、「先年、奄美嶋人來、奪_二取大隅國人民四百人_一、同以將志、其時不_二言上_一、今慣_二彼例_一、自致_二斯犯_一歟、仍徵_二發人兵_一、警_二固要害_一、令_二追捕_一也、若有_二其勤_一者、可_レ被_レ加_二勸賞_一」者、又、高麗國同^(載)儀^(符)兵船五百艘_一向_二日本國_一、欲_レ致_二許者_一、誠雖_二浮定_一、依_二云々所_一言上_二也_一」者、有_二先日言上類文書等_一、件飛驒去月十四日出_レ符云々、太解怠、諸卿定申云、「奄嶋者等事、大宰符定行了、亦重警_二固要害_一、弥加_二追討_一、兼又可_二祈_一禱佛神、若追討使々、殊有_二勤節_一、隨_二其狀_一、還可_二褒章_一之由、可_レ被_レ裁_二報符_一、大宰以_二飛驒_一雖_二言上_一、事頗似_レ輕、不_レ可_レ給_二勅符_一、只可_レ賜_二官符_一、又高麗國浮定、不_レ可_レ

不_レ信、可_レ被_二種々祈禱_一」、定詞甚多、只是大概了、丑剋、諸卿退出、此間雨不_レ止、諸卿申云、「爲_二敵國_一、可_レ被_二種々御祈禱_一」者、

〔權記〕長徳三年○史料纂集

十月一日、御_二南殿_一、《○中略》一獻之後、左大臣於_二東階_一、令_二予_一奏_二云、「自_二大宰府_一言上飛驒使、在_二建春門外_一、以_二解文_一付_二所司_一云々」、大貳藤原朝臣同付_二此使_一所_レ送書狀云、「南蠻賊徒、到_二肥前・肥後・薩摩等國_一、切_レ人物奪、侵犯之由、逐_レ日申來、仍言_二上解文_一」者、事是非常也、停_二樂并庭立奏等_一、事了之後、定_二申解文内雜事等_一」者、仰云、「依_レ請」、事了還御、于_レ時、丑二刻也、頃之、左大臣參_二上殿上_一、被_レ奏_二太宰府解文_一、《四通入_レ筥、件文、大臣於_二陣座_一披見、令_二大外記致時朝臣參_二殿上_一、令_二予_一奏_二之_一、》于_レ時、上卿朝餉、依_レ仰持參、候_二晝御座_一、待_二出御_一奏聞、又、依_レ仰、一々開_二解文_一讀_レ之、仰云、「事已急速、須_下早定申令_上給_二報符_一」、即、以_二勅旨_一、傳_二之大臣_一、々々還_レ陣、同三刻、被_レ奏_二太宰府言上南蠻蜂起之事_一、諸卿定_二申之_一、「如_二府解_一者、追討使々、若有_二其功_一、隨_レ狀、可_レ被_レ賞歟、又、可_下能成_二祈禱_一、重固_中要害_上之趣也」、又、申_二高麗國案内事_一、定申云、「先日言上府解、不_レ注_下到_上鷄林府_{（慶州）}成犯者夾名上、今日解文、已注_二其名_一、仍須_レ追_二討彼成犯則矢等類_一之由、注_二載報符_一」、又、「可_レ給_二官符長門國_一、但得_二其賊_一者、可_二賞賜_一之由、可_レ加_二載狀中_一、抑件南蠻・高麗事、雖_レ云_二浮說_一、安不_レ忌_二危_一、非常之恐、莫_レ如_レ成_レ愼、能_レ被_レ致_二種種御祈_一、可_レ被_レ立_二奉幣諸社使_一、行_二仁王會_一、修_二大元法等_一歟」者、依_二御殿籠_一、不_レ能_二奏聞_一、依三宿物不_二持來_一、申_二案内於左府_一、白地罷出、此夜、左府宿給、二日、雨、早旦、參内、奏_二夜前雜事_一、仰云、「依_二定申_一行_レ之」、

〔日本紀略〕一條天皇○新訂増補國史大系

《丁酉》^{（長徳）}三年《○中略》十月一日壬辰、旬、天皇出_二御南殿_一、于_レ時、庭立奏之間、太宰府飛驒使參入云、「南蠻亂_二入管内諸國_一、奪_二取人物_一」、奏樂之後、諸卿定_二申件事_一、《○中略》十三日甲辰。奉_レ遣_二幣帛使於諸社_一、依_二筑紫之騷動_一也、《○中略》十一月《○中略》二日癸亥、太宰府飛驒使來、申_下伐_二獲南蠻冊餘人_一之由_上、五日丙寅、賜_二官符於太宰府_一、

〔百鍊抄〕四 一條天皇 長徳三年○新訂増補國史大系

十月一日、旬、出_二御南殿_一之間、太宰府飛驒到來、申_下高麗國人虜_二掠鎮西_一之由_上、仍止_二音樂・庭立奏事_一了、令_二諸卿定_二申之_一、

○是歳ヨリ先、奄美嶋人、大隅國ヲ襲ヒ人民ヲ奪取スルコト、便宜合叙ス、大日本史料長徳三年十月一日、旬儀、官奏、大宰府、奄美島人ノ大隅、對馬等ニ亂入スルコトヲ奏上スノ條、及ビ同月十三日、筑紫ノ騷動ニ依リテ、諸社ニ奉幣スノ條參看、長徳三年、大隅國等諸神ニ増爵ノコト、東京大学史料編纂所所藏島津家本舊記雜録前編卷一所收天喜二年（一〇五四年）二月二十七日大宰府符案ニ見ユ、鹿児島県史料旧記雜録前編卷一、九号、及ビ平安遺文七一二号、參看、

○小右記、萬壽二年二月十四日條ニ、大隅掾爲賴、右大臣藤原實資ニ檳榔ヲ進ムルコト、同七月二十四日條ニ、爲賴、牛鞆色革ヲ進ムルコト、萬壽四年七月二十二日條ニ、爲賴、營貝ヲ進ムルコト、長元元年九月七日ノ條ニ、實資、夜久貝ヲ藤原隆家ニ頒ツコト、長元二年八月二日條ニ、大隅國住人良孝、赤木・檳榔・夜久貝ヲ進ムルコト等見ユレドモ、今、略ス、

○十一月二日、日本大宰府、南蠻人四十人ヲ伐獲シタルコト飛驒シテ奏ス、

〔日本紀略〕一條天皇 長徳三年○新訂増補國史大系

十一月《○中略》二日、癸亥、大宰府飛驒使來、申_下伐_二獲南蠻冊餘人_一之由_上、五日、丙寅、賜_二官符於太宰府_一、

○大日本史料長徳三年十一月二日、大宰府、南蠻人討伐ノ狀ヲ奏スノ條、及ビ同五日、大宰府ニ官符ヲ下ス條參看、

◎九九八年（日本長徳四年・宋咸平元年・戊戌）

九月十五日、日本大宰府、貴駕島ニ下知シテ南蠻ヲ捕ヘ進メシメタルコトヲ、言上ス、

〔日本紀略〕一條天皇 長徳四年○新訂増補國史大系

九月《○中略》十五日、庚午、太宰府、言_下上下_二知貴駕島_一、捕_二進南蠻_一由_上、

○大日本史料長徳四年九月十五日、大宰府、貴賀島ヲシテ、南蠻ヲ捕進セシムルノ由ヲ奏ス條參看、

◎九九九年（日本長保元年・宋咸平二年・己亥）

○八月十九日、日本大宰府、南蠻賊追討ノコトヲ奏ス、

〔日本紀略〕一條天皇 長保元年○新訂増補國史大系

八月《○中略》己巳、太宰府、言_下上_上追_上討南蠻賊_上由_上、

○大日本史料長保元年八月、大宰府、南蠻賊追討ノコトヲ奏ス條參看、

◎一〇二〇年（日本寛仁四年・宋天禧四年・庚申）

○閏十二月二十九日、日本大宰府、南蠻賊徒、薩摩國ニ到來シ人民ヲ虜掠シタルコトヲ、太政官ニ報ズ、入道前太政大臣藤原道長、年ヲ改メテ後、追討ノ官符ヲ下スベキコト命ズ、

〔左經記〕寛仁四年○増補史料大成

閏十二月《○中略》廿九日、晴、大夫奉親朝臣持_上來大宰府解_上云、「左右大辨共有_上所勞_上不_レ被_レ仕、仍令_レ申_上事由_上於_上左府之處_上、被_レ仰云、「令_上汝申_上」者、仍所_上持來_上也」者、南蠻賊徒到_上來薩摩國_上、虜_上掠人民等_上之由也、即參_上左府_上申_上事由_上、次參_上關白殿_上、令_レ覽_上府解_上、次爲_上御使_上參_上御_上寺_上申_上此由_上、仰云、「改_上年之後、儘可_上追討_上之由、可_レ賜_上官符於大宰府_上」、

○大日本史料寛仁四年閏十二月二十九日、大宰府、南蠻賊徒ノ、薩摩ニ來リテ、人民ヲ虜掠スル由ヲ報ズ條參看、

◎一〇六六年（日本治暦二年・宋咸雍二年・丙午）

○十月十八日、藤原明衡卒ス、是ヨリ先、明衡、新猿樂記ヲ著シ、貴賀之嶋ニ渡レル商人ノコトヲ記ス、

〔新猿樂記〕○東洋文庫

八郎真人者商人主領也、《○中略》東臻_上于俘囚之地_上、西渡_上於貴賀之嶋_上、交易之物、賣買之種、不_レ可_レ稱_上數、唐物、《○中略》本朝物、緋襟・象眼・縵綢・高麗軟錦・東京錦・浮線綾・金・銀・阿古夜玉・夜久貝・水精・琥珀・流黄・白[金葛]・銅・鐵・縑・蟬羽・絹・布・糸・綿・纈纈・紺布・紅・紫・茜・鶯羽・色革等也、

◎一一一一年（日本天永二年・宋成和元年・辛卯）

○九月四日、日本太政官、陣定ヲ行ヒ、喜界嶋ノ者、紀伊國來著ノコト等ヲ定ム、

〔長秋記〕天永二年○増補史料大成

九月《○中略》

四日、《○中略》酉刻許、自_上左大臣殿_上、有_下可_レ令_上參内_上之仰_上、仍着_上束帶_上參也、定始程也、宇佐小宮司方事、肥前國司訴申事、唐人隱_上財物_上參着事、喜界嶋者來_上着紀伊國_上事、以上定、了左大臣殿退出御、下官退出、此後、右大將度奉行定云々、

○大日本史料天永二年九月四日、陣定ヲ行ヒ、肥前國司ノ訴及ビ宋人來著ノコト等ヲ議ス條參看、

◎一一四五年（日本久安元年・宋紹興十五年・乙丑）

正月二十四日、日本内大臣藤原頼長、人ヨリ、去年、南蠻人、大宰府ニ漂著シタルコトヲ聞ク、

〔台記〕四 天養二年春秋○増補史料大成

《○中略》

廿四日、《庚午、》人傳、南蠻 被_レ放_上惡風_上、來_上西府_上云云、去年、有_上此事_上、西府民曰、「大府之福、有_上此瑞_上云云」、(割書)《大府、謂_上禪閣_上、》

○史料綜覧久安元年正月二十四日、南蠻人、大宰府ニ漂著ス條參看、

◎一一七二年（日本承安二年・宋乾道八年・壬辰）

○七月九日、日本伊豆國司、伊豆國出島ニ、蠻夷異形ノ者來著シ南海ニ逐電シタルヲ奏ス、

〔玉葉〕卷第拾 承安二年秋冬○國書刊行會本

七月

《○中略》

九日、《丙子、》或者語云、伊豆國異形者出來云々、國司《賴政朝臣知行國也、》注_二進子細_一、去比、當國出島、鬼形者五六人許出來、乘_二珍重之船一艘_一、《以_二紫檀・赤木等之類_一造_レ之、》來_二着件島_一、島人等暫成_二畏怖之思_一、雖_レ不_レ近_レ之、只有_二希異之容貌_一、未_レ有_二非常之所行_一、仍漸近寄粗言談、然而敢不_二返答_一、又或者進寄、勸以_レ酒、于_レ時、雖_レ不_レ出_レ詞、有_二許容之氣_一、仍與_レ酒、如_レ此之間、彼鬼類等、乞_二弓箭等_一云々、島人惜而、不_レ與_レ之、爰各太怒、以_二三尺許白木_一、《件木、自_レ本指_レ腰云々、》打_二突嶋人等_一、即時、五六人終_レ命、殘七八人、僅雖_二存命_一、其疵太重云々、仍嶋人等發_二人勢_一、帶_二弓箭_一欲_レ射_二留_一之、鬼等敢不_二恐怖_一、自_二其腋_一出_レ火、所_二耕作_一之畠等、悉燒_二失之_一、則乘_二船逐電_一、指_二南海_一逃云々、疑是蠻夷之類歟、緯希代也、仍粗注_二置之_一、國司付_二藏人右少辨親宗_一奏_レ之云々、

〔古今著聞集〕卷十七 變化○新訂増補國史大系

承安元年七月八日、伊豆國興島の濱に船一艘つきたりけり、島人とも難風に吹よせられたる舟そと思ひて行むかひて見るに、陸路より七八段ばかりへたて、舟をとゝめて、鬼、繩をおろして海底の石に四方をつなきて、かの鬼八人、船よりおりて海に入て、しはし有て岸にのほりぬ、島人粟酒をたひければ、のみくひける事馬のことし、鬼は物いふ事なし、其かたち、身八九尺計にて、髪は夜叉のことし、身の色赤黒くて、眼まろくして猿の目のことし、皆はたか也、身に毛おひす、蒲をくみて腰にまきたり、身にはやうゝゝの物のかたをゑり入たり、まはりにふくりんをかけたなり、をのをの六七尺はかりなる杖をそもちたりける、島人の中に弓矢持たる有けり、鬼こひけり、島人おしめければ、鬼ときをつくりて、杖をもちて、まつ弓持たるをうちころしつ、およそうたるゝもの九人かうち五人は死ぬ、四人は手を負なからいきたりけり、其後鬼脇より火を出しけり、島人皆ころされなすと思ひて神物の弓矢を申出して、鬼のもとへ鬼海に入て岸より船のもとに至りてのりぬ、則風にむかひてはしりさりぬ、同十四日國解をかきて、おとしたたりける帶をして國司に奉りたりけり、件の帶は蓮花王院の寶藏におさめられけるとかや、

〔百鍊抄〕第八 高倉院○新訂増補國史大系

承安四年《○中略》

二年《○中略》七月八日、伊賀守源仲綱言_二上去々年七月比隱岐島鬼形出來之由_一、

○古今著聞集、異形ノ者、伊豆國ノ嶋ニ來著ヲ承安元年七月八日トスルハ、誤リナラン、百鍊抄、伊賀守トスルハ伊豆守、隱岐島トスルハ奥ノ嶋ノ誤リナラン、史料綜覽承安二年七月八日、異船、伊豆奥島ニ漂著スノ條參看、

◎一一八七年（日本文治三年・宋淳熙十四年・丁未）

○九月二十二日、日本、源賴朝、中原《○宇都宮》信房ヲ鎮西ニ遣ハシ、鎮西奉行人天野遠景ト共ニ貴海島ヲ撃チ、源義顯《義經》ノ黨與ヲ搜索セシム、尋デ、翌年三月五日、賴朝、信房ノ貴賀井島ニ渡リタル條々ヲ報ジ併セテ海路次第圖ヲ呈シタルヲ賞シ、五月十七日、遠景ノ使者、賴朝ニ、貴賀井島ニ渡リテ合戦シ義顯ノ黨與ヲ歸降セシメタルコトヲ報ズ、

〔吾妻鏡〕第七 文治三年丁未○新訂増補國史大系

九月小、《○中略》廿二日、庚申、所衆信房《号_二宇都宮所_一、》爲_二御使_一下_二向鎮西_一、是天野藤内遠景、相共可_レ追_二討貴海島_一之旨、依_レ含_二嚴命_一也、件嶋者、古來無_レ飛_二船帆_一之者_上、而平家在世時、薩_二廣國住人阿多平權守忠景_一、依_レ蒙_二勅勘_一、逐_二電于彼島_一之間、爲_レ追_二討_一之、遣_二筑後守家貞_一、家貞、粧_二軍船_一、雖_レ及_二數度_一、終不_レ凌_二風波_一、空以令_二歸洛_一云々、今度、同_二意豫州_一之輩、隱居歟之由、依_レ有_二御疑貽_一、有_二此儀_一、又去年、河邊平太通綱、到_二件島_一之由、聞食之間、殊所_二思食企給_一也云々、遠景、元來在_二鎮西_一云々、

〔吾妻鏡〕第八 文治四年戊申○新訂増補國史大系

二月大、《○中略》廿一日、丁亥、天野藤内遠景去月狀、昨日自_二鎮西_一參著、去年窮冬、令_二下郎從等渡_一貴賀井嶋_中形勢_上訖、令_二追補_一之條、定不_レ可_レ有_二子細_一、但雖_レ相_二催鎮西御家人等_一、不_二揆_一之間、頗以_二無勢_一、重可_レ被_二下_一御教書云々、所衆信房、自身可_二渡海_一之旨、殊結構、然而、遠景加_二制止_一之間、遣_二親類等_一、尤爲_二精兵_一之由裁_レ之、此事、兼日風_二聞于京都_一、仍自_二執柄家_一、有_二被_一諷諫之旨_上、降_二伏三韓_一者上古事也、至_二末代_一者、非_二人力之所_一可_レ覃、彼嶋境者、日域太難_二測_一其故實、爲_レ將_二軍士_一、定有_二煩無_一益歟、宜_二令_一停止_二給_上之由云々、

《○中略》

三月大、《○中略》五日、辛丑、所衆信房、去月之比、自_二鎮西_一進_二書狀_一、貴賀井嶋渡事、條々言上、去年依_レ窺_二得件形勢_一、海路次第、令_レ畫_二圖_一、獻覽、是可_レ爲_二難儀_一之由、諸人依_レ奉_二諷詞_一、頗雖_二思食止_一、御_二覽彼繪圖_一之後、強不_レ可_レ疲_二人力_一歟之由、更思食立云々、此間事、信房、殊竭_二大功_一之間、今日、所_レ被_レ加_レ賞也、《○中略》五月、《○中略》十七日、壬子、遠景已下御使等、渡_二貴賀井嶋_一、遂_二合戰_一、彼所已歸降之由、所_二言上_一也、而宇都宮所衆信房、殊施_二勲功_一云々、爰信房、近江國領所者、去比、被_レ付_二非違別當家領_一訖、就_二此大功_一、可_レ返給_二歟之由_一言上、次鎮西庄者、成勝寺執行昌寛眼代、成_レ妨之間、召_二昌寛返狀_一、雖_二下賜_一、猶以不_二靜謐_一、企_二濫行_一之趣、訴申云々、仍彼是有_二沙汰_一、大理者依_レ爲_二寵臣_一、不_レ限_二件庄_一、可_レ止_二地頭_一之旨、被_レ下_二綸旨_一之間、關東爭被_二泥申_一哉、執行眼代事者、可_レ被_レ加_レ判、但雖_二再三訴_一申之、於_二關東國_一、不_レ可_レ成_二自由勘發_一之由、被_レ仰云々、《○下略》《○便宜、月ヲ以テ改行ス、》

○左兵衛尉平家貞海賊追捕ノ功ヲ賞シ、左衛門尉ト爲スコト、史料綜覽長承三五年（一一三四年）閏十二月十二日ノ條ニ、平清盛、勅ヲ奉ジテ、追討使トシテ筑後守平家貞ヲ大宰府ニ下向セシメ、肥前國住人日向通友ヲ討ツコト、同永暦元年（一一六〇年）五月十五日ノ條ニ、入道前筑後守平家貞卒スルコト、同仁安二年（一一六七年）五月二十八日ノ條ニ見ユルニ據リテ、家貞ノ貴海島ニ逐電シタ平忠景ヲ追討セルハ永暦元年以降、仁安二年以前ノコトナラン、

○一一六〇年ヨリ一一六七年ノ頃、平忠景、勅勘ヲ被ムリテ貴海島ニ逐電シ、平清盛、勅ヲ奉ジテ筑後守平家貞ヲ遣ハシテ追討セシムレドモテ果サザルコト、及ビ一一八六年、河邊通綱、貴海島ニ渡ルコト、便宜合敘ス、平忠景、貴海島ニ逐電

◎一一九二年（日本建久三年・紹熙三年・壬子）

○二月二十八日、日本、源頼朝、貞種《氏闕ク、》ノ貴賀島ニ渡ラザルコト及ビ陸奥國追討ニ參會セザルコトノ過怠ニ據リテ、豐前國伊方莊地頭職ヲ停メ、宇都宮《中原》信房ヲ補任ス、

〔佐田文書〕一 源頼朝下文寫○東京大学史料編纂所所藏影寫本

頼朝御判

（花押）

下 豐前國伊方庄住人

補_二任地頭職_一事

（宇都宮）
前所衆中原信房

右、前地頭貞種、不_レ渡_二貴賀島_一、又追_二討奥州_一之時、不_二參會_一、依_二此兩度過怠_一、可_レ停_二止彼職_一也、仍以_二俊房_一所補任也、於限有課役者、任_二先例_一可_レ致_二其勤_一之状、如_レ件、以下、

建久三年二月廿八日

○大日本史料建久三年二月二十八日、頼朝、豐前國伊方莊地頭貞種《氏闕ク、》ノ、貴海島、及ビ陸奥國ノ軍ニ會セザリシヲ責メテ、之ヲ罷メ、中原信房ヲ以テ之ニ代フ條參看、

◎一二四三年（日本寛元元年・宋淳祐三年・癸卯）

○九月十七日、是ヨリ先、日本ノ僧等、肥前國小置賀島ヲ發シ、是日、流球國ニ著シ、尋デ二十九日、宋嶺南道福州ニ著ス、

〔漂到流球國記〕○圖書寮叢刊伏見宮家九条家旧蔵諸寺縁起集

寛元々年九月八日、於_二肥前國小置賀島_一、得_二順風_一放洋、《○中略》同十七日、漂_二到流球國東南方_一、船裏諸人衆口討論、或云_二貴賀國_一、或云_二南蕃國_一、或云_二流球國_一、終即皆謂、是流球國也、《○中略》

同二十九日、到_二大唐嶺南道福州龍盤嶼_一了、《○中略》

次年大宋淳祐四年五月廿日、長離_二唐地_一、

同六月一日、着_二本朝岸_一了、
抑、龍盤嶼《似与切、海中州、》者連河縣近隣也、連河縣者、高祖大師遁_二琉球國_一、着_二大唐國之最初地也、今昔雖_レ異、
風勢一致者歟、于_レ時、寛元二年九月廿八日、夜、於_二燈下_一、依_二船頭并一兩同法説_一、粗以記之、

用圖_二形牀_一、遙送_二後輩_一、猶如_二炭上圖_一繪日輪、

○本書、長文ナルニ據シテ、便宜、琉球本嶋ヲ、或ハ貴賀國マタハ南蕃國カト論ジタル記ノミヲ掲グ、本書ニ記セル琉球國、沖縄島ニシテ、ナリ、本文ノ訓仮名、略ス、
全文ノ訓讀并ニ註解、山里純一『古代日本と南島の交流』ニアリ、

◎附記一 一二六六年ヨリ一六〇九年三月ノ奄美諸島ニ関ハル史料、『奄美諸島編年史料 古琉球期編』ニ収ム、
一三世紀ヨリ一四世紀ノ喜界島ニ関ハル條文ノ綱文、左ニ掲グ、

一二六六年是歳、大島、琉球國ニ入貢ト傳フ、

一三〇六年四月十四日、千竈時家、所職及ビ所領ヲ子女ニ譲リ渡シ、嫡子千竈貞泰ニ口五島・わさの島・鬼界島・大島ヲ、次男千竈經家ニ沖永良部島ヲ、三男千竈熊夜又丸ニ七島ヲ、女子千竈ひめくまニ一期分トシテ徳之島ヲ與フ、

稱名寺所藏日本圖及ビ妙本寺所藏雜錄所收日本圖ヲ合敘ス、

一三六三年四月十日、島津道鑑、惣領島津師久ニ、薩摩國守護職及ビ同國河邊郡十二島并ニ五島ヲ譲與ス、

◎附記二 奄美諸島、硫黄島及ビ琉球ヲ記シタル七世紀ヨリ一三世紀ノ時期ノ史料、右ニ掲グル史料ノ外、日本ノ類書・軍記・物語、中国史料ニ數多アレドモ、明ラカニ東南アジア人、硫黄島マタ台湾島ヲ記セル史料等、略ス、上述シタル池邊彌、松田清、山里純一并ニ山里純一ノ史料集成參看、

結語

永山氏が論じるように、俊寛などが遠島された鬼界が島（硫黄島）と喜界島の別称である貴海島・貴駕島は峻別されるべきである。また、山里氏が論じるように、多禰・大隅・薩摩を介しての赤木・夜光貝の交易は奄美諸島が重要な資源地であった。但し、本稿では、南島の日本と中国との硫黄交易についての史料は、分量の加減もあり採録できなかった。

喜界島の城久遺跡群の形成と展開に直接に関わる史料は、上記の日本と南島の交易の拠点としての喜界島の機能を示史料と、999年の貴駕島の南蛮、12世紀中葉の平忠景の貴海島逐電と平清盛の平家貞派遣による追討、1187年～1188年の源義経一党の追捕のための源頼朝による追討使派遣の史料などであることが確認できた。この故をもって、本稿を、「城久遺跡群の歴史的評価の前提」と題した次第である。